シリーズ

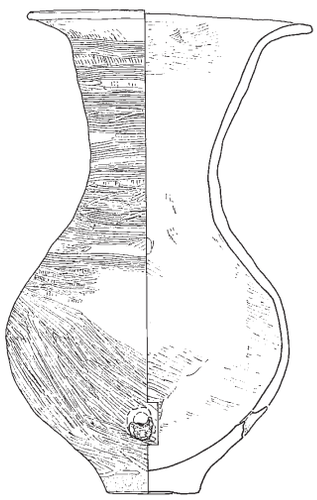
弥生土器をつくろう！②　弥生時代中期前半編

弥生時代中期のはじめ頃（紀元前３世紀？）になると、土器に地域色がみられるようになります。近畿地方の壺は、弥生時代前期までヘラで一本ずつ３～４条の平行線を引いていたものが徐々に多条化し、中期前半には櫛状の工具でまとめて施文するようになります。

この「櫛描文」は、中期前半までは直線文のみで飾ることが多く、一部で波状文や扇状文がみられるものの少数です。次第に厚くなった口縁端部に波状文やヘラ描きの格子文が施されることもあります。

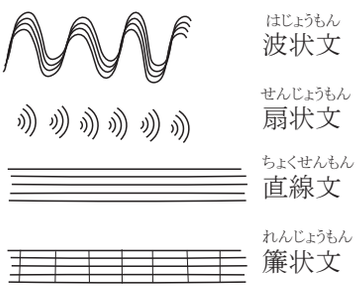
この時期に多くみられる壺は「広口長頸壺」といい、長い頸部とラッパ状に拡がる口縁が特徴です。頸部から胴部上半の広い範囲を櫛描直線文で飾り、口縁部・頸部と胴部の境界が不明瞭となるのも特徴の一つです。

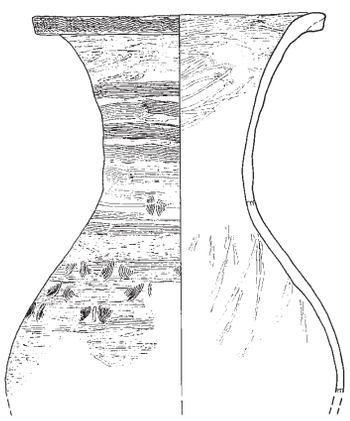
唐古・鍵遺跡第 47 次調査
大溝（SD-2105）から出土した土器



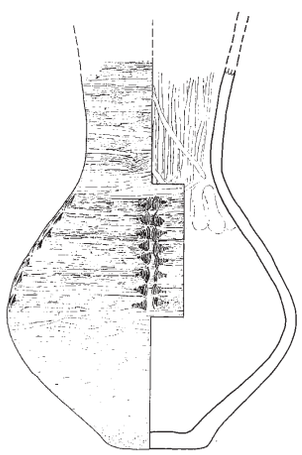
唐古・鍵遺跡第 23・26 次調査で出土した土器

櫛状工具による文様例





唐古・鍵遺跡第 23 次調査
大溝（SD-103）上層から出土した土器



唐古・鍵遺跡第 22 次調査
井戸（SK-1101）下層から出土した土器

この時期には、直線文と扇状文を組み合わせた簡易な流水文がみられるようになります。「疑似流水文」と呼ばれるこの装飾は、割付けの難易度が高い通常の流水文がまだ少ない中期前半の特徴の一つです。